

Title	『中務内侍日記』論：皇統に対する作者の意識
Author(s)	阿部, 真弓
Citation	語文. 1999, 72, p. 7-17
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68942
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

『中務内侍日記』論

——皇統に対する作者の意識——

阿部真弓

はじめに

鎌倉末期成立の『中務内侍日記』は、伏見天皇に仕えた内侍の日記である。冒頭に序文ともいえる作者の感懐が述べられた後、前半部には、伏見天皇がいまだ春宮であった時代、弘安三年（一二八〇年）から九年（一二八六年）までの、そして後半部には即位後の弘安十年（一二八七年）から正応五年（一二九二年）までの記事が収録されている。

本日記の課題は少なくない。『中務内侍日記』の研究は、対にされることの多い『弁内侍日記』に比するなら、若干ではあるものの、進んでいるといつていいだろう。諸本論については、早くに主たる伝本が校合され、彰考館蔵本が現存伝本の底本であることが、すでに判明しており、⁽¹⁾ 作品論も、先学によって、主題論、典拠論、京極派歌壇との関係からのアプローチなど、各方面から考究がなされている。しかし、そもそも研究論文の絶対数が希少である。そして、作品に対する既成の評価を打破しにくいというのが、なよりの問題ではないかと考えられる。

殊に、主題論においては、序文の問題と絡め、作者の無常観のみ

が強調されてきた。全編通じて哀調感漂う本作品から、そうしたものを読み取ることに異論はないが、そのために見過ごされてきた要素も多いのではなからうか。近年、『中務内侍日記』研究にも、ようやく転機の兆しが現われ、興味深い見解が提出されるようになったものの、本作品には、未だ検討すべき問題が多く残されていると思われる。

拙稿では、従来、ほとんど取り上げられることがなかったが、本日記の本質に迫る上で看過してはならないと思われる問題について、冒頭に配された数話のエピソードを端緒にし、⁽²⁾ 考えてみたい。

—

『中務内侍日記』には、序文の後、弘安三年十二月十五日の冷泉富小路殿の風情ある様子が描かれている。そこは後深草院が御所としており、ここに後の伏見天皇、当時春宮の熙仁親王も住していた。院が、饑法のため伏見殿に御幸されたその夜、中務内侍は雪模様の庭の様子に心を動かされるが、思いを分かち合う相手がいな

ひとり眺めんもすきくしかりぬべければ、入て臥しぬるに、春宮御方、釣殿に出でさせおはします。御供、左衛門督の殿・

内侍殿、男には左中将ばかり参る。宰相殿・宮内、三人寝ぬるを、「御所に成りぬる」とてあれば、みな起きて参る。

春宮が出御され、次々に女房達が参上するが、男性で伺候する者は左中将京極為兼のみであった。「音なく静まりたるに、たえ／＼岩に洩るゝ水の音ばかり」するという、誠に清寂とした夜である。

権大夫、祇候したる程なるに、御使あり。「常磐井殿の御参り」とばかり答へて、局には小さき童ばかりぞある。「いと念なく、初雪の心地して」など申。

右掲引用部の解釈については諸説あるが、岩佐美代子氏の説に従いたい。³³「権大夫、祇候したる程なるに」とあることから、春宮権大夫堀川具守は御所に参上する予定になっていた、おそらくその夜、御所の夜番に当たっていたのであろうと推察される。興味ある今宵、伺候する男性貴族が最近出仕するようになった京極為兼のみでは、ということ、堀川具守が御所に伺候したと思われる頃、「御前に参上せよ」と宿直所にお使いを出されたところ、「今は常磐井殿へ参っております」との返事があったという状況と解釈される。

この後、春宮は、同じく留守であった後深草院中宮東二条院の邸で、風情ある壺庭を御覧になる。女院方の女房も多くはまだ臥してはおらず、「いと艶だちておかしき事ども」を語り合つた。

如上において注目したいのは、情趣あるものの、しかしあまりにも静かで閑散とした御所の光景である。この記事をありのままに解釈するなら、この夜春宮に仕えていたのは女性ばかりで、夜番に当たっていたはずの公卿ですら伺候せぬことがあったということになる。多くの貴族は後深草院伏見殿御幸に供奉していたと考えられるものの、しかし実は、そのような特別な事情に限らず、寂々たる春宮

御所というのがごく日常の状態だったらしい。それは春宮時代の伏見天皇の周辺を描いた『春の深山路』から窺い知ることができる。

・十日、昼つけて東宮に参りたれば、殊に人少ななり。庇にて打ち声作れば、やがて出でさせおはしまして、今年はいまだ郭公こそ聞かね。誰か聞きたる」と御尋ねあれば、御供に候ふ女房たちも、いまだ聞かぬ由申さる。
(弘安三年四月十日)

・御方違へのために、院、この御方へなる。ただ康仲二人ばかり伺候す。暁の鐘の後還御。
(弘安三年五月十四日)

・廿六日、坊に参りたれども人もなし。

(弘安三年八月二十六日)

飛鳥井雅有は、春宮を中心とした文化サークルが生成されていく状況をつぶさに記しているが、その一方で、日頃は人影のない春宮御所の様子も克明に記録している。またさらに、当時は春宮御所に限らず、後深草院仙洞御所ですら、伺候する貴族の少なかつたことが、「とはずがたり」の記事から見出される。

人召す音の聞こゆれば、何事にかと思ひて参りたるに、御前には人もなし。御湯殿の上に、一人立たせたまひたる程なり。このほどは、人々の里住みにて、余りに寂しき心地するに、常に局がちなるは、いづれの方さまに引く心にか」など仰せらるゝも、例のとむつかしきに、……
(巻三 弘安四年)

鎌倉期において、皇居に伺候する者が女性中心だったことについては、服藤早苗氏が「平安期には男たちが天皇を日夜守っていたのに対し、鎌倉期には女たちが守護していたことが鮮明になる。(中略)平安後期から、天皇の父である上皇が院政を行い政治権力を掌握した結果、幼帝の周囲には政治力を頼む男たちがさほど集まらなくな

つたため、女たちの役割が重くなったのである」と指摘しておられるが、春宮のみならず、後深草院に参上する貴族までもが少ない最大の理由は、やはり当時が大覚寺統の世であったことに求めねばなるまい。以下に簡単な年表を掲げ、この前後の皇位継承の状況を確認しておく。

文永5 (1268) 年8月25日 亀山天皇世仁親王立太子。

9 (1272) 年2月17日 後嵯峨法皇崩御。

11 (1274) 年1月26日 後宇多天皇踐祚。

建治元 (1275) 年4月9日 後深草院、尊号を辞す。

11月5日 後深草院熙仁親王立太子。

弘安10 (1287) 年10月12日 東使、西園寺実兼を訪ね、受禪の

ことを計らう。

10月21日 伏見天皇踐祚。

一時は失意の底にあつた後深草院側も熙仁親王が春宮に立ち、弘安三年頃は両統の関係も比較的安定した状態を保っていた。しかし、立太子よりはや五年、踐祚を切望しても、そのきざしが全く現れない。こうした状況を打開するために、『春の深山路』作者飛鳥井雅有が後深草院の下令を拝し、鎌倉に下つたことは周知のことである。

・坊に参りたれば、宮内卿の局にて、院の御方より、「思し召さるるやうあり。差し当たりて咎めなどあるまじき程ならば、春までは延びて伺候せよ」と仰せ下さる。

(『春の深山路』弘安三年十月二十六日)

・今日は日良ければ、門出づべき由、在秀申せば、その儀になりぬ。康能朝臣承りとして召せば、暮るる程に参りぬ。院の御方より仰せ下さるる事も多し。まづ忝く身もあらぬかとのみ辿ら

る程のことも交はれり。やがて東宮御前にて、関のあなたにて申すべき事書きなど賜ひぬ。

(『春の深山路』弘安三年十一月十三日)

この雅有の東下が『中務内侍日記』起筆の直前、弘安三年十一月であつたことは注目されてよいだろう。本日記は、まさに持明院統の焦燥感が飽和状態に達していた時期のエピソードから始発するのである。

そして、かくの如き持明院統の閉塞状況を象徴しているのが、実は、常磐井殿に行つたため、春宮御所に参上していなかつた春宮権大夫堀川具守である。

まず、具守が参仕していたという常磐井殿に関わる問題から考察したい。この殿について、注釈書では「大宮院(後深草院生母)御所」という注を付している。確かに、常磐井殿はもと西園寺実氏の別邸で、実氏没後は大宮院(実氏女)に譲られ、以後、女院御所として使われていたらしい。しかし、以下の「勘仲記」の記事から、常磐井殿のもう一つの側面が見えてくる。

・丑剋皇居炎上、(中略) 上皇即御幸常盤井殿、可為仙洞云々

(弘安元年閏十月十三日条)

・即参院、(常盤井殿) 今日御幸始也、院司右少辨信輔奉行、先有御薬儀、不見及、人々参集之後有出御、寄御車於中門廊、(大宮院御同宿故殿)

(弘安三年正月三日条)

・自今日被始行院最勝講、藤宰相頼親卿奉行、於常盤井殿被整道儀

(弘安四年五月三日条)

・夜半自冷泉朱雀火災出来、常盤井仙洞焼亡、泉屋并京極面北門等焼残云々、新院大宮院新女院俄御幸摩殿御所

(弘安五年十一月二十六日条)

右の史料から、常磐井殿には大宮院と亀山院が同座していること、この邸は亀山院の御所でもあったことが判明する。すなわち、「常磐井殿の御参り」という言葉は、弘安三年十二月十五夜、堀川具守は亀山院仙洞御所に伺候していたことを意味しているのであった。亀山院の院政下にある以上、春宮権大夫とはいえ、そちらに参上する方が常のことだろうが、先述の如く「権大夫、祇候したる程なるに、御使あり」という口吻からは、その夜の具守の春宮御所参仕は予定されていたことと窺われる。とすれば、具守は春宮御所での勤めを差し置いて、亀山院御所に伺候したと、春宮をはじめ女房達が受け止めたことは必定である。

当然のことながら、貴族達は両統の動きを鋭敏にとらえ、行動していた。両統の間のみならず、京と幕府との間を巧みに動き廻り、権力を掌握した西園寺実兼はまた別格としても、いずれの御代となろうと自分の地位を確保するための処世術は必要であり、具守の行動もそうしたものの一つとも解釈できる。大覚寺統の世にあって、春宮権大夫という持明院統寄りの官職に就いているが故に、なお一層如才なく立ち回らねばならなかったであろう。また、彼はもとより、大覚寺統に近い人間であったと考えられるふしもある。

堀川具守は正二位内大臣堀川具実の孫、従一位太政大臣堀川基具の男である。基具は後嵯峨院評定衆の一人であり、文永十年に亀山天皇が治天の君に決定されてから以降は、天皇議定、院評定に参仕した公卿であった。評定衆は独立性が高いとはいえ、大覚寺統側近という点では変わりがないだろう。では、具守の弘安期前後の閲歴を、『公卿補任』を参考にし、以下にまとめてみる。

文永4(1267)年 非参議従三位、右中将(19歳)

6(1269)年 参議従三位、右中将(21歳)

7(1270)年 参議正三位、右中将(22歳)

8(1271)年 参議従二位、右中将・加賀権守(23歳)

11(1274)年 権中納言従二位(26歳)

建治元(1275)年 権中納言従二位、春宮権大夫左衛門督(27歳)

弘安元(1278)年 権中納言正二位、春宮権大夫左衛門督(30歳)

7(1284)年 権大納言正二位、春宮権大夫(36歳)

当時の堀川家の格を考慮する必要があるにしろ、亀山・後宇多天皇の治世にあって、具守は順調に昇進していた。そして、とりわけ注意すべきは、具守女が亀山院后新陽明門院に仕えており、弘安八年には後宇多天皇皇子(後の後二条天皇)を生み、延慶元年に西華門院の院号を受けていることである。後の話ではあるが、当時、すでに大覚寺側との関係が深かったことを窺わせる有力な証左となる。こうした人物が春宮権大夫に就いていたことについて、持明院統が、釈然としない感情を抱いていたことは想像に難くない。

当場面でこの堀川具守と対照的位置に配されているのが、左中将京極兼兼である。周知の如く、後に、為兼は伏見天皇の絶大な信任を得て、政務に携わる他、伏見天皇の和歌師範として歌壇を牽引した人物である。後深草院に出仕していた彼が、いつから春宮御所に参仕するようになったかははっきりしないが、『春の深山路』の弘安三年七月六日条に姿が見え、おそらくその頃からであっただろうと推定されている。この章段では「男には左中将ばかり参る」と記さ

れ、表現は端的だが、ひとときワクローズアップされる。新参者ながらただ一人、いつ即位するともしれない春宮の御前に参上した為兼と、春宮権大夫であるにもかかわらず、亀山院御所へ向かった具守

『中務内侍日記』冒頭の場面を覆っている空気はややもすれば漠然とした哀感として捉えられてしまう傾向にあるが、以上に確認してきたように、ここには、もつと冷然とした、まさしく持明院統の厳しい現実が端的に表現されてもいる。五年前、後深草院の覚悟の訴えにより、持明院統は春宮を立てることができた。時流を再び呼び戻すことができたと思つたことであろう。しかし、依然として人少なのである春宮御所、そして、「常磐井殿の御参り」という具守の返答に、中務内侍を含め、女房たちは未だ大覚寺統の世であることを否応なしに痛感させられ、我が御代を言祝ぐ日まで果たして幾程待たねばならないのだろうか」と悲痛な憔悴感を抱いたに相違ないのである。⁶⁾

『中務内侍日記』は、まずはこうした背景があることを認識した上で、解釈されるべき作品ではなからうか。持明院統に仕える人々是我が君の御代の到来を渴望し、十年以上にわたつて皇統の行方を凝視し続けていた。冒頭に如上の挿話を配した『中務内侍日記』には、こうした意識が通奏低音として響き続け、それは、さまざまな形で表出していると考えられる。従来、作者の無常感の現れとして括られて来たものの中にも、実は「皇統」を意識した表現が少なくないのではないだろうか。

では、次節においては、そうしたものの一つとして、景物に関わる表現を取り上げ、それらの意味を再検討してみたいと思う。

新玉の年を重ねれば、春のみ山の木隠れより、花郭公月雪につけて、心を延ぶる慰みもさすがにありといへども（下巻冒頭）

とあるように、中務内侍は種々の憂愁にとらわれながらも、春宮のもとで、四季折々の景物を楽しみ、風流ある日々をすごしており、作品にもそれが反映されている。作者は、鳥の音、天象の移り変わり、月に映える草花等々に心を動かし、そうした事物はしばしば詠歌の契機ともなった。本稿で検討している冒頭のエピソード、弘安三年十二月十五日条の記事にも、次のような場面がある。

A すさまじき物とかや言ひふるすなる、師走の月夜なれど、宮の中はみな白妙に見えわたりて、木々の梢は花かと思ゆ。

B なを立ちかへり、ありつる方を御覧せらるれば、少し晴れつる空もまたかきくらし、風もはげしく冴えたるに、やもめ鳥の一声も、あはれをそへてぞ覚ゆる。

ながめわび心も空にかきくれて降る白雪にかすむ月影

うきふしを思ひ乱れてはかなきは汀の蘆の雪の下折

C かくて入らせ給ひぬれば、御留守の御所に寝ぬれども、しばしは猶端を開けて、晴れ曇る空をながめて、何となく物語どもするに、時うつり鳥もしばく鳴くに、またあはれを添ふる鐘の音も枕にちかき心地して、いとあはれに物悲し。

我ならで鳥もなききり音をそへて明けゆく鐘の絶ゆるひ々

きに

さて、『中務内侍日記』において、とりわけ印象的に描かれている風物は月であろう。本日記は夜の出来事を取り上げることが大半で、

おのずから月の記述も多く、しばしば天象記事と相俟つて、さらに哀れ深い情趣を醸し出している。引用文傍線部(単線)は、そうした表現個所である。

月や天候に関わる問題については、すでに藤本勝義氏の考察がある。²⁾藤本氏は、

本日記の特徴である憂愁の色調は、上巻に特に顕著であるが、その上巻も、弘安七年の分が多く、先にも触れたように、弘安三〜六年の記事はそれぞれ一事例ずつしかないという偏りを示している。特に印象的なそれらの事例が選びとられ、他は切り捨てられたと思われる。これらは、決まって、東宮を囲んでの風流な遊びの模様を情趣的に描いていて、自然描写が必ずなされ、ほとんどが月光をポイントとしているという特徴がある。

とされた後、諸事例を検討され、まとめの一つとして、次のように述べられた。

そしてほとんどに、雨を中心とした薄暗い空合いが記されており、作者自身の憂愁の思いの重なる天象の日が、自然と選びとられたものと考えられる。これは、日記執筆時、すなわち無常の世を十分体験した四十歳前後(「新注」説)の、死を控えた時期の作者の心情が、かなり投影されていると思われる。決して、王朝の情趣そのものを無条件に継承しているものではない。中世的無常観が被さっているものといえる。

右は適切な見解であり、傾聴すべき考察である。しかしながら、本日記には、「作者の心情」や「中世的無常観」という語だけでは括弧することのできないもの、『中務内侍日記』を理解する上で重要な切り口となり得る表現が存するのではないかと、私は推測している。結

論を先取りして言えば、A、B、Cはそうした例としてとらえられる可能性を秘めていると考えられるのである。

藤本氏は、上巻に登場する月と天候の描写に限定して考察された。本日記におけるそれらの意味を読み解くには、やはり上下巻ともに検討すべきであろう。そこで、あらためて、一見ありふれた素材である月・天候を検討し、その意味や機能を考究したい。

D……四年の八月十六日、黄昏の程よりかきくれて降る雨の、更くるまゝに名残なく晴れて、同じ空とも見えぬ月影おもしろければ、春宮の御方入らせおはしまして御月見あり。霧降りておかしきに、なを疊らぬ露の光(中略)あか月近くなる程に、院の御方はまた南殿の月を御覧せらる。宵よりはこよなう霧も降りまさりて、木々の梢も見えわかず、闇める空に雁鳴き渡りて、あはれも添へて面白ければ、

霧こめてあはれも深き秋の夜に雲井の雁も鳴き渡るかな
御夜の後もとみに寝られず。

夜なくは寝ぬ夜の友と眺むるに霧な隔てそ秋の夜の月
Eまた弘安五年四月十七日、嵯峨殿の御留守なりしに、雨も小止まず、空さへ閉ちて日数積る頃、公私、初音を待つ慰めばかりに、雨夜の空を御覧せらる、御供に、三位殿御局・大納言殿・別当殿、男には綾小路の三位・土御門の少将、そゞろごとも申て、おかしく興ある事どもなり。心づくしに待ち明かしたる郭公は、それかとおほく程の一声に、花たち花のかほり懐かしきも、よそふる人もあり顔の心地して、光なき夜の闇のうつゝも、思ひなす方はいづれも浅からねば、なか／＼なる忘れ形見に、今も尽きせざりけり。

時鳥おぼめく程の「声」に名残の空もむつまじきかな

D、Eは、冒頭の弘安三年十二月十五日条に続くエピソードである。Dは月見の記事で、夕刻からの雨も上がり、「名残なく晴れて」とあるものの、読み進めていくと、霧模様の中の観月であったことが理解できる。Eでは、幾日も雨の中に閉じ込められたことが書かれている。藤本氏が指摘しておられるように、上巻では、D、E、また先述のB、Cにも見られる如く、天候状態は良好とはいえず、月も冴えた様子はほとんど見せることなく、臙げな姿で描かれるところが、こうした様相は次第に変化を見せ始めるのである。

F五月六日、御花延びて、六条殿へ十三日御幸なる。御留守もいっしか人なくさびて、雨しめやかなる夕暮に、松向殿の御簾巻き上げて御覧じ出だされたり。御前に大納言殿ばかり候ひ給ふ。簀子に立ち出でて見れば、池には分くべきひまもなく茂りたり。蘆間に見ゆる舟の、ありか定めず浮きたるさまもはかなきに、障り多く見ゆれば、

はかなくて蘆間に見ゆる浮舟のよるべ定めず物ぞ悲しき暮れぬれば入らせ給ひぬ。今宵は夜も疾し。恐しきまで人なくのどかなる釣殿に出て見れば、雨も少し小止む気色なり。雲の絶間に時ぐもり出でて霞める月の光も珍しき心地して、大納言殿、

雨雲にしばしやすらふ夜半の月眺むる人の心をや知ると覚え侍て、いたく心尽しげなる影も恨めしく、何となく物あはれなり。

(弘安九年五月十三日)

Fは上巻最末尾にあたる挿話である。後深草院の留守中、雨の夕暮に、春宮が庭を御覧になった。相変わらず人の少ない御所、あた

かも、上巻最初のエピソードを再現するかの如き場面だが、やや持ち直した天候が急転、悪化したBとは異なり、Fでは、作者が釣殿に出ると、雨は小康状態となった。一面の雲も切れ切れとなり、月影さえもぞく。

G暮れぬれば春宮は院の御所へ入らせおはしまして、御舟に召して月御覧せらる。空は曇り、村雲だちて、なか／＼見所あるさまなり。心の中に、

晴れ曇る月ぞなか／＼めづらしき空も心のある夜なるかな御舟ども果てぬ。御湯殿の上の簀子に立ち出でて見れば、月のあたりなる雲も晴れて、庭の浅茅も露の光も見え分くに、更けにける夜の気色、釣殿の方へ出て見れば、灯籠の灯火かすかに、遣水の石間に漏るゝ音のみあはれに聞こゆ。

(弘安十年九月十三日)

H十五日、内侍所御神楽。雪、宮の中におびたくしく降りたるに、和琴に冷泉の侍従頼成(中略)月は更け行くまゝに冴えたるに、日数経て降り積みたる雪に、かつ降り添ふ気色、池の中島、松の木ずゑ、木々の梢輝きたるも、庭火の影に束帯の黒きが上に降りかゝる雪は、打払ふも折からことに、澄み神さびたる気色限りなし。

(弘安十年十二月十五日)

I八日、月さし出づる程に、勾当と一車にて行。夕月夜の淋しき影、内野のはる／＼と霜枯の野辺に障る物なく見えたるもなか／＼おかしきに、

霜枯の野辺にしあればはる／＼と所得がほに月のみぞ澄む

(正応元年十一月八日)

J二月十日、春日の臨時の祭に立つ。此儀、初めたる事なれば、

面白くも嬉しくて。(中略)更けたる月の、木の間より見えて、庭火の影、神さびたる笛の音、拍子の音もすこく、舞人の立ち舞ふ気色、光を神もいかにと、面白くめでたし。

君が世にかゝる光の色そふる神の心も思ひ知られて

(正応三年二月十日)

下巻に移ると、Gでは、曇りがちの空はやがて晴れわたり、Hでは、冴えた月光が雪の積もった宮中をさらに輝かす。大嘗会の女工所始に向かう場面を描くIにおいては、澄んだ月が内野を「所得がほに」照らしている。上巻の弘安七年三月十七日条で、「おぼつかなき程に霞める月」が、「かこちがほなる」とも言ひぬべ」き様子であったのとは対照的である。また、Jで、月は春日臨時祭を照らし出し、光を添えている。

如上に述べ来たように、上巻と下巻では、明らかに、月の輝きに歴然たる差異が看取されるのである。はたして、その違いは何に起因するのであろうか。

ここで、上巻と下巻の内容の差、すなわち、下巻のほとんどが、弘安十年十月二十一日伏見天皇即位以後の記事であることに思い至らねばなるまい。『中務内侍日記』に記された月や天候の様相は、伏見天皇、持明院統をめぐる状況と、あたかも呼応する形として迎られるのである。Bでは、未だ即位の見通しも立たない頃にある春宮が、寂然たる御所の様子を「御覽せら」れると、風は立ち、空はやにわにかき曇り、その視界さえも遮られてしまう。Dでは霧に、Eでは雨に閉じ込められ、「光なき夜の闇」と、まさに、閉塞的状况にあった当時の持明院統の姿が、ここに象徴的に表現されている。しかし、F、Gでは、そうした後深草院、春宮御所にも、ようやく月

光が射し始め、長年の切願であった伏見天皇即位を果たしてから以降は、月は清澄な光を照射し続ける。

こうした表現は偶然によるものとは思われない。中務内侍は、実は、上巻弘安八年三月十七日条にて、「月にすむ雲井の花をよそに見て馴れし昔の今日ぞ恋しき」雲の上の月に心はすむものを標の外にや思ひなすらむ」と、宮廷を月に喩えた表現を使っている。こうした所為を勸案すると、右に提示した、持明院統の状況と月・天候に関する表現の連動性は、意識的になされた手法であると考えるべきであろう。

月が皇室の暗喩として登場することは、中世において、宮廷に奉仕する者の手になる作品に多々見られる。『建礼門院右京大夫集』では、次掲の和歌のように、建礼門院の比喩として使われる。

雲のうへにかかる月日のひかりみる身のちぎりさへうれしとぞ
おもふ (二番歌)

あふぎみしむかしの雲のうへの月かかるみやまのかけぞかなし
き (二四一番歌)

『高倉院升退記』では、最勝光院にて御月忌始まりしにまいりて、雨の降りしに晴れて、月のおぼろなるをながめて、

よそへつゝながむる月もおぼろにて雲隠れにし君ぞ恋しきと、月は故高倉院を偲ぶよすがとして登場し、また、後深草天皇に仕えた弁内侍による『弁内侍日記』では、月や天候は作品の重要なモチーフとなっており、殊に月に關しては、その象徴化はさらに進み、皇室贊美の記号として用いられている。

四月十三日、りんじに内侍所へ使にたちて侍しに、こんらうを

とをりて、ぎやうでんのだんのうへなれば、夜ふけてめぐる月
のかげさやかに見えしかば、弁内侍

ますかゞみくもらぬみちにつかへてそさやけき月のかげも
見るべき
(第五段 寛元四年四月十三日)

中務内侍とほぼ同時代を生きた後深草院二条の日記』とはすがたり
でも、月光は、後深草院を示唆するものとして登場している。

夜もやうく更けゆけども、帰らむ空もおほえねば、むなしき
庭に一人ゐて、昔を思ひつゞれば、折く御面影、たゞ今
の心地して、何と申尽くすべき言の葉もなく、悲しくて、月を
見れば、さやかに澄み昇りて見えしかば、

くまもなき月さへつらき今宵かな曇らばいかにうれしから
まし
(巻五 後深草院崩御)

『中務内侍日記』においても、月と天象は皇室に対する意識を喚
起するモチーフとして、重要な役割を担っているとみなしてよいだ
ろう。従来、中務内侍個人の無常観の表出と解釈されてきた表現の
中に、彼女の「内侍」という公的職掌と積極的に結び付けて理解せ
ねばならない文辞が、少なからず存在するのである。すでに多くの
先学に指摘されているように、上巻の題材選択にはかなり吟味が重
ねられたと考えられるが、ここに論じた点も取捨基準として機能し
たと推察される。

また、さらに私が注目するのは鳥の音である。引用文に二重傍線
を付して示したように、作品冒頭に置かれた一連のエピソードには、
鳥に関する記述が多く見られる。紙幅の制約上、羅列的に述べるに
留めざるをえないが、月や天象が視覚的に皇統への意識を喚起する
ものならば、それに対して、鳥の音は聴覚的に作用を及ぼす役割を

果たしていると考えられる。

鳥の音に関していえば、すでに松本寧至氏が下巻の弘安十年十二
月二十六日条について、貴重な説を提示しておられる。

廿六日、皇后宮の御方へ成る。人なくて、御供にたゞ一人参
りたれば、還御待ち参らせて池の方見出だしてつくくと眺む
るに、雁の鳴きて過ぐるが、昨日よりこそ春も立ちしに、いつ
しか越路にや帰るらん、今は秋こそ頼みなるらめと思ふに、
春来ぬと雁は越路に急ぐなり心に秋を頼めてぞ行く

皇后宮は後深草院皇女、後宇多院皇后遊義門院である。松本氏は、
持明院統に政権が移ったこの時期の女院を「また秋の来るまで立去
る雁のようなものだ」と指摘され、彼女の複雑な立場がここに示さ
れていると述べられた。先の見えない閉塞状況の只中であつた、D
の「霧こめてあはれ深き秋の夜に雲井の雁も鳴き渡るかな」歌と勘
案するなら、雁の音は大覚寺統への意識を想起させる景物と解釈で
きる可能性を秘めているよう。

そして、Cの部分については、岩佐美代子氏が興味深い解釈を提
出しておられる。

女房等が寝物語に月旦するのは源氏物語の人物や筋立である。
そのあげく覚えず時を過ごして、明けようとする鳥の声、鐘の
音に驚かさされ、はつと心にひらめくもの――

ああ、そうなのね。浮舟だつて身を投げる直前、こんな明
方の景色の中で鐘の音を聞いたのだわ。ほら、あの歌――
鐘のおとの絶ゆるひゞきに音をそへて我が世つきぬと君
に伝へよ

何ていいんでしょう、身につまされて泣きたいぐらい。あ

ら、鳥も私と一しよに鳴いているわ^⑩

岩佐氏は、「源氏物語」浮舟歌を、Cの、「我ならで鳥もなきけり音をそへて明けゆく鐘の絶ゆるひびきに」歌の典拠とみなされた。穿った読みにすぎる危険をあえて冒していうと、「我ならで」歌に、「我が世つきぬ」——皇統断絶にも通ずる——の意を響かせるなら、さらに、この和歌は含蓄深いものとなるらう。

このように作品を読み直していくと、郭公の初音が、実は、持明院統にとつて、最も重要な鍵となつてゐることが判明する。冒頭部において、春宮周辺では、郭公の声はほんの臚げにしか聞くことができない。Eの二重傍線部に示した如く、待ち明かした上によろやくかすかに耳に届く程度のものであつた。この弘安五年四月十七日条の次に記される弘安六年四月十九日条においても、同種の内容が書かれている。

南殿の花たち花盛りなる頃なれば、香を懐かしむ郭公もやと待たせおはしますに、心づくしの一声もあかず恨めし。

郭公の「おほめく程の一声」は、「霞める月」同様、持明院統の閉塞状況及び焦燥感の象徴と解釈することができよう。なぜなら、「待つかひあ」つて、伏見天皇即位後、中務内侍は郭公の声をはつきりと耳にすることができたからである。

四月十四日、松尾へ立つ。大幣に葵を具して車に入る。賀茂ならで又葵はありけりと、今日始めて、珍しう賞えて、待ちわびしその神山の葵草又許す世の神もありけり

大納言殿の御局へ、「待つかひありて、只今郭公の鳴き待つるは、もし同じ声をや聞く」とて、

今鳴かん声をし聞かば時鳥教へやりつる初音とは知れ

(下巻 正応三年四月十四日)

大納言殿からは、未だ鳴かぬという返事が来るが、中務内侍は「雨晴る空にのどけく眺めて待つらん程を思ひやらる」と返歌する。ここには、もはや焦りといった感情は見えず、むしろ内侍達の余裕すら感じられるのである。

まとめ

第一節においては、作品冒頭の表現から看取される、持明院統の切迫した状況について、第二節では、月の光、鳥の音といった景物に包含された意味や機能について、考究を試みた。

以上に論じてきた場面は、これまで、さしたる関心と呼ぶこともなく、情趣ある春宮御所のひとこまとして読まれてきたと思われる。先述したように、本稿は従来の説を否定しようというものではない。しかし、こうした情景から『中務内侍日記』が始められた意味が、これまであまりに等閑に付されてきたのではなからうか。『中務内侍日記』を論究するにあたり、作者の内侍という職掌、そして両統迭立の始発期という視点の導入が必要不可欠であることを、再認識すべき時期に来ていると考える。

本論は紙幅の都合もあり、検討すべき問題を種々残したまま、稿を終えざるをえない。『中務内侍日記』研究の前提としての位置づけに甘んじることとなるが、これを礎に、今後、課題の論究に努めた

注

(一) 岩佐美代子氏「彰考館中務内侍日記について」(『中世文学』二十六、

昭和五十六年十二月)。

(2) 三角洋一氏『中務内侍日記』について、『ミームス』三、昭和四十七年一月、松本寧至氏『中世女流日記文学の研究』(明治書院、昭和五十八年)に指摘されているように、冒頭の数話は、ある程度まとまったグループを形成している。本稿では、松本氏説に従い、弘安七年の記事あたりまでを主な検討対象としている。

(3) 新日本古典文学大系五十一『中世日記紀行集』(岩波書店、平成二年)二五頁、注二十七。

(4) 『女性史からみた』弁内侍日記』(新編日本古典文学全集月報五、平成六年六月)。

(5) 注(3)前掲書。玉井幸助氏『中務内侍日記新注』(大修館書店、増補版昭和四十一年)の注も同主旨。なお、常磐井殿については、川上貢氏『日本中世住宅の研究』(墨本書房、昭和四十二年)を参考している。

(6) 春宮御所の女房達が、日頃から大覚寺統への対抗意識を抱いていたことは、『春の深山路』の次の記事からも見て取れる。

十九日、春宮の御鞆始めなり。まづ参内、その後坊に参る。女房、今日御鞆始めなり。御師匠の身さながら立たざらむこと本意なかるべし。且は院の御方よりもしきりに仰せあり。いかさまにも立つべし。機(の)所望は新院の御はからひにてあれば、叶はずば、常盤井殿の御所にてこそ細は申されぬ。この御所は別の御ことなれば、などと申さるるを。(弘安三年一月十九日)

(7) 『中務内侍日記論——その世界と執筆契機——』(青山学院女子短期大学紀要)三十八、昭和五十九年十一月。

(8) 拙稿『弁内侍日記』作者の執筆意識——天候記事をめぐって——(『語文』六十一、平成五年九月)。

(9) 松本寧至氏注(2)前掲書。

(10) 『中世の女流日記』中務内侍日記——友愛の文学』(『文学』一九九一年夏、平成三年七月)。

拙稿での本文引用は、以下の書による。

- ・『中務内侍日記』
- ・新日本古典文学大系五十一『中世日記紀行集』(岩波書店、平成二年)
- ・『春の深山路』
- ・新編日本古典文学全集四十八『中世日記紀行集』(小学館、平成六年)
- ・『建礼門院右京大夫集』
- ・新編国歌大観第四卷私家集編II、定数歌編(角川書店、昭和六十一年)

・『高倉院升退紀』

・新日本古典文学大系五十一『中世日記紀行集』(岩波書店、平成二年)

・『弁内侍日記』

・『校注』弁内侍日記』(和泉書院、平成元年)

・『勘仲記』

・『増補史料大成三十四』勘仲記 一』(臨川書店、昭和四十年)

・『新日本古典文学大系五十』とはずがたり たまきはる』(岩波書店、平成六年)

・『勘仲記』

・『増補史料大成三十四』勘仲記 一』(臨川書店、昭和四十年)

・『新日本古典文学大系五十』とはずがたり たまきはる』(岩波書店、平成六年)

・『勘仲記』

・『増補史料大成三十四』勘仲記 一』(臨川書店、昭和四十年)

・『新日本古典文学大系五十』とはずがたり たまきはる』(岩波書店、平成六年)

・『勘仲記』

・『増補史料大成三十四』勘仲記 一』(臨川書店、昭和四十年)

・『新日本古典文学大系五十』とはずがたり たまきはる』(岩波書店、平成六年)

・『勘仲記』

——本学大学院助手——